



笑廿堂高先生校定

白石先生鬼神論

浪萍草書屋

文金堂梓



王高橋



白石先生鬼神論序

夫鬼神之跡恍兮惚兮言之難也尚矣易傳曰陰陽不測之謂神又曰知變化之道者其知神之所為乎唯神也故不疾而速不行而至中庸曰鬼神之為德其盛矣乎視之而弗見聽之而弗聞體物而不可遺使天下之人齊明盛服以承祭祀洋洋乎如在

賜侯氏藏書

其上如在其左右嗚嗟先聖之教至矣乎我邦寶正之際白石源公學該洽博識透洞深著作之富動及瑣辭貫所釋鬼神論一篇能近取譬而言所難言者也其辭則諳古說則典始則根據經義中則旁引訟異終不歸納雅正實足蒙矯穢矣唯是一時應需小而辨物作者自不為意私

淑之徒轉傳騰寫國字糾紛訛誤相錯殆至不可讀頃日鬻書家某乃鑄此篇校者某之刻已咸吾所知於高者來劇求敘焉余謂校者所照亦皆轉傳之物無定本之取正則恐有未悉考究者存而余不與焉要之免園小冊有瑕纇固不足揜源公之瑜此刻足以拯私淑之徒騰寫乃為敘以

弁其首云

寛政庚申秋九月望

天山眞逸撰



鬼神論上

龜後守誕五位下源君著

鬼神のことはとてしも能くいふとんがふ  
ゆふあはれ因たまことかまくいたむとんをま  
せよなま信す事まことあひ伝ひるよの祕  
き事ハシテある事まことあひ傳ひるよの祕  
ちく信して後子トヨハシテシテ後子  
シテすとすらうさん人トあすとてひでた  
よきととほへきよの事まことかくよ  
うりて風ひをむくふ夏めがくよお知ふ  
うもありやるトヤリトシビ同まつせに

吾みでるも之れうとらとえりんみく考ス  
順孫乃生もを妨ぐれざる所送とすとせ  
ヨリ死でるもあす事あ」といふもと不孝の  
子力多の親を葬らうんとぞ恐ふせよ  
老死する事あんをかくもし今乃をへうに  
後よふくはち持と知りたんとが夫子をちきく  
経ひくる小國とくに住むがかつよかうす  
まうらがんといふうんがよく鬼はぬかうん  
いま、まとうさんばうくをく死をまうんと宣

まひきやうく車かくまみやうくまうく  
なれとくノ人をつゝてくはるん後鬼よそり  
ぬまちとくとくん御ノ人生ヨキテ御アん後ハ  
死ヨキテモノふ車ヨシやうの程ヨテ夫子  
かくまセキマムノムアノ樊遲ヨキテ民乃義を  
ほくま鬼神を敬ヨ遠ヨくまうれとおヨアヒ  
ウトおえまひヨ彼此ヨカヨヨキアノモナ  
く人にはくふ民乃義を勢はなし鬼神  
とあく遠ヨくほん鬼ヨうくはかくまれ通ヨ  
うあくうの代ヨセうくとくドヤニルとくいぬ

卷之二

多々禮人主を爲し祀を送至鬼神子  
孫の處たゞとて禮記せり又曰  
禮樂あるとも鬼神ありとも作れど  
鬼と人鬼のたゞに似まとまると云ふ  
はるよりよしわからずはよアノトも通せど  
かと云はゆきわきばれも免狀力一とく  
あざれり聖賢詔モえどもかくかく命めあらた  
禮とんづくよく孰一達みほ正のみうちアソヘ  
繫陽乃朱子めいひきんすがわみぬ今試み  
三禮よりけり多々禮儀記  
周礼儀記

周禮儀記  
卷之三  
此章終乃送

仲シテ一えみすの爲シテ仲シテの事シテ游シテ仲シテと陽シテ  
之シテ春シテ夏シテ秋シテ冬シテかくシテ而シテ居シテと陰シテのぬシテ秋シテ冬シテ陽シテ  
うちシテ居シテ仲シテ而シテ陽シテの事シテ仲シテの事シテの陽シテの陽シテ陰シテうちシテ  
ほくシテ仲シテ而シテ陰シテの事シテ仲シテの事シテの陰シテの陽シテかくシテ居シテ仲シテ仲シテの事シテ  
づシテたシテ此シテ事シテ能シテ有シテ無シテ張シテ横シテ集シテたシテし  
後シテ而シテ鬼シテとシテはシテ是シテ居シテ仲シテの事シテがくシテ  
ぬシテをシテ鬼シテとシテはシテ是シテ居シテ鬼シテとシテ陰シテ靈シテ神シテ  
之シテ陽シテ而シテ是シテ禮シテ力シテ居シテ是シテ又シテ文シテ又シテ之シテ  
ウシテ天シテ神シテ也シテ祇シテ人シテ鬼シテとシテ天シテ乃シテ事シテ仲シテ  
天シテのシテ又シテ氣シテのシテ清シテぬシテちシテるシテものシテ神シテとシテ日シテ月シテ星シテ

辰シテ力シテ類シテ人シテとシテ變化シテのシテけシテかシテれシテだ  
易シテにシテ不可シテ測シテ天シテ並シテあシテりシテ神シテとシテ不シテ可シテ能シテせシテばシテのシテ山シテそ  
むシテくシテら川シテなシテ波シテまシテまシテるシテとシテ行シテくシテす  
居シテきシテはシテあシテれシテ地シテよシテあシテてシテ祇シテとシテはシテ祇シテ乃シテまい  
うシテへシテもシテ尔シテ又シテ作シテ周シテ元シテとシテ人シテとシテ人シテとシテ見シテハシテ著シテ見シテ  
のシテ義シテあシテりシテ朱シテ子シテのシテ說シテ人シテとシテあシテてシテ鬼シテとシテ人シテとシテ見シテハシテ著シテ見シテ  
とシテかシテるシテ降シテあシテ鬼シテとシテ人シテとシテ人シテとシテ見シテハシテ著シテ見シテ  
天シテとシテはシテの魄シテとシテすシテ也シテ而シテ鬼シテ魄シテ天シテとシテ  
かシテれシテあシテりシテ鬼シテとシテ古シテ一シテ方シテ先シテ主シテ制シテまシテし  
れシテはシテ天シテトシテうシテはシテめシテうシテれシテハシテかシテりシテはシテ天シテ神シテ

也祇人鬼神よりせすりは事あら力星辰  
寒暑水旱山林川谷丘陵より雲を御風雨とあ  
せむ子孫もあてあるくみ祀典祀典とは祭禮也天神社  
社稷を主とする事乃は御爲く玉社とたて  
又群生のきみに大社と建みるゝ所爲く玉社とたて  
社稷乃神を主むれ先土山の神と社稷乃神はく司令神  
圓門玉行春屋戸籠めす祀日命の御人の令  
け玉ハ室宿カ林行くはれ社泰屋の事をほりこれ  
トヨムヘシテハ戸社富士を主むれ社也御考乃神も御主ノ七席  
と制御考乃神も御主ノ七席と春、禱の祭あり秋も寧め祭御考乃神の事をほりこれ  
諸侯は天哉アキラムと仰す惟封内アシマクサル  
事内入山川を主す  
境内アシマクサル御生のために玉社と建シアシマクサル御生の

倭社アシマクサル又五席アシマクサル五祀アシマクサルハ七祀アシマクサル内ニテ五  
三席アシマクサル二祀アシマクサル庶士アシマクサル二席アシマクサル二祀アシマクサル庶人アシマクサルを得す  
ハアメ先アシマクサルを度アシマクサルアモテ一祀アシマクサルを主す事を得す  
カキドレ社アシマクサル先王アシマクサル乃祀典アシマクサルアモテ分アシマクサル別アシマクサル不  
トキアシマクサル事アシマクサルトシタリトシタリアシマクサル天子ハ天也  
天子ハ天也  
のを大夫アシマクサルハ一あのきアシマクサルハ今限アシマクサルナカ  
サナアシマクサル大アシマクサル小アシマクサルの異アシマクサルナカ  
天子アシマクサル天也アシマクサル中アシマクサル一アシマクサル而して天地也  
アシマクサル事アシマクサル天也アシマクサル天也アシマクサル氣アシマクサルおのびアシマクサル一人は  
天也アシマクサル事アシマクサル天也アシマクサル天也アシマクサル其誠敬アシマクサル極アシマクサル事アシマクサル  
すいあんよだかの天也アシマクサル事アシマクサルあふり集アシマクサル  
百神アシマクサルづくれの職アシマクサル事アシマクサル事アシマクサルノ  
諸侯アシマクサル

玉のあそどとくろの封内乃名山大川等を守りづる  
かくちる處をいはせ神おのひく盛神ミツノミコトへま  
理ミタケたり大丈ハ家の主あれをかの五祀の神ミタケノミコトを守  
ゆく摩ミタケすふけミタケニシテ家ミタケノミコト三祀ミタケミコトと王室ミタケミコト五祀ミタケミコトと祀ミタケミコト有  
門行ミタケミコトとある禮ミタケミコト三年ミタケミコト乃喪ミタケミコト父ミタケミコトの天子ミタケミコト庶人ミタケミコト守ミタケミコトと之  
考ミタケミコトもんきミタケミコト心ミタケミコトにれミタケミコト位ミタケミコトをもんれ其ミタケミコト前ミタケミコト子  
えくミタケミコトの尊ミタケミコトと卑ミタケミコトきミタケミコト位ミタケミコトをもんれ其ミタケミコト前ミタケミコト子  
モ先ミタケミコトをすミタケミコト而ミタケミコトいきミタケミコトてハセミタケミコトトミタケミコトたがひよ  
ヨリ教ミタケミコトを降ミタケミコトて庶士庶人ミタケミコトがミタケミコト其親ミタケミコトをもんミタケミコトす  
ゆくミタケミコトすわやんかくミタケミコトハ人ミタケミコトをす竟ミタケミコト魂ミタケミコトおほく

天と地と水と火と山と城郭ミタケミコトの後ミタケミコト子孫ミタケミコトをすミタケミコトす  
事ミタケミコトをもんミタケミコトて又ミタケミコトあらミタケミコトけミタケミコトて其ミタケミコト理ミタケミコトあら  
んミタケミコト古ミタケミコト力ミタケミコト聖王ミタケミコトの禮ミタケミコトを制ミタケミコトすミタケミコトすミタケミコトす  
りミタケミコト形ミタケミコト人鬼ミタケミコトとミタケミコトいきんミタケミコトかミタケミコトの鬼ミタケミコト神ミタケミコトとミタケミコトすミタケミコト年ミタケミコト  
礼ミタケミコトよりミタケミコトてミタケミコトは名ミタケミコトりと斯人ミタケミコトすわそばミタケミコトてミタケミコト不ミタケミコト能ミタケミコトすミタケミコト也ミタケミコト  
夫子ミタケミコト云ミタケミコトてミタケミコトす礼ミタケミコト乃鬼ミタケミコト神ミタケミコト也ミタケミコトとミタケミコトしミタケミコトすミタケミコト也ミタケミコト  
鄭ミタケミコト乃子ミタケミコト彦ミタケミコトみミタケミコトとミタケミコトびミタケミコト春秋ミタケミコト傳ミタケミコト云ミタケミコトえミタケミコトとミタケミコトすミタケミコト也ミタケミコトられ  
遣ミタケミコトすミタケミコト言ミタケミコトすミタケミコト鬼ミタケミコト神ミタケミコトの義ミタケミコトをミタケミコト求ミタケミコトむミタケミコトよミタケミコトうミタケミコト子ミタケミコト彦ミタケミコト乃  
すミタケミコトば人ミタケミコト今ミタケミコトもミタケミコトくミタケミコト化ミタケミコトすミタケミコトを魄ミタケミコトとミタケミコトよミタケミコト取ミタケミコト魄ミタケミコトを主ミタケミコトと

陽たるは魂とて竹より多くおもはれん  
わらうす父ぬれとけり 則もとんべ脂と  
ふくろし魄すてにならぬ これ易れ男女精と交へ万物化  
生まとひはまくさん  
朱よを陽よりてゆるきて天一本と生むと又圓す子と  
一を父とすくすくと生むすでうとまを又うと氣と水とせり みの魄稍  
ちゆりて動くことうわうごく はうるゆともれたら  
こうと竟とく あらはれ二火を生むかく一火は陽と筋はうらく冥  
ニをぬくすかくあく血とぬくく血はうらくとけりさ  
きはあくすのきひ まへる父ぬの精血を 先傳もの筋をやくつよ集め  
うりて胎をなす胎よつまくらむく  
北漢陳氏力 説ぢうど  
をねまくはづひあら 挑すよあくせくいと先とひ魄とくはくき  
ほぢうわゆとりひ鬼とくべくふほくとくちこひ  
精へみあり神を文く魄ハ金を魂ハ土陰陽へき升降せ升るより火も降るより水  
をかげんとくて升るより火も降るより水

カの八金と云ひ力の皆土を有するを多うありがむが平易く天の氣を  
也の数より天一もとまへ地ニ火以生へ天ニ木を生へ也四金を生へ天五土を生  
大土生てに生へ後地生へて天セ火を成へ地も本火事にて天九令と成  
し地ナ土を生すアリモリ人ナ火アリて生れ生すアリムテ地生すトテ火事の氣を備  
シテ形ノよもと火アリ也生れ生すアリ火事の氣を火事の氣を備  
火事と火アリ瘡痛を生れヨリ火形生すヨリ火事生すヨリ火事の氣を火事の氣を  
傳ふるアリ人火事生ハ鬼火属シヤ人火事生ハ鬼火属シヤ  
湯を鬼火属すヨリ有り湯と魂トヨリ陰火鬼火と有り  
レ火打リ鬼火陽火神ナリ也 滋南子の説考  
れ鬼火の灵神ヘ乃れ灵靈火  
宇火也モモト火アリヨリ火事生  
火入すアリ之火は鬼火耳目火聰明ナリ火事生  
とも火事アリ 已上祭儀 夫子宰我火事生  
とも火事アリの後火事生

たるめり鬼と神と爲念すハ教力つゝも凡生も  
かあはばれどもみすしハかるす土子降るかにこそを  
鬼といふ骨肉へ下り多きしよ法もく御玉と云  
うの氣を上り奉事も掲りて昭明臺高懽愴をも  
ちる而物力精あく神の著々とどう仕もこれ先  
人ほりやうに因より宣ひうなづくちゆゑへ思ひ  
けむとよきの靈吸出入する事とくづれへ思ひ  
ておとせられぬ時ばかり耳聰目明ちる魄とくづれ  
すれどもれり畢竟といふれあと感をねまわ

既死後より鬼といふ神と云ふのと合  
ま、何より是聖人乃却くみあひたるもんがくは  
いふべくつけれども皆死すんハ鬼らすそくか  
くふと名づけく鬼とぞよふれども鬼は  
其骨肉みとどきく下ふるよきて野乃キモ持てぬ  
こふを打お骨肉うめびの天がうみまへるにあ  
鬼のうよハ地にしづくまく所にうみまへるにあ  
ぐめてえ魂乎天天升るなりうらへてよかてをもとへるにあ  
天の體乎今より人れすに人を争  
り生うる者あく無くまことにあす あくいハ蒸一升れ處の氣  
うらへさき蒸く人のうる時子喬の  
うらへさき蒸く人のうる時子喬の或き人とうて物をもすく  
うらへさき蒸く人のうる時子喬の或き人とうて物をもすく

卷之三

み氣力あらゆると散りて集ひ人をも  
まつてはく鬼神とちるの毫めぬに厚き有  
鬼と名はくもの魂を天より力おこやく人神と  
謂ひあらかじゆうやく神と名付ふれあつまふ  
氣と天せむ事すなむ散りて天地がくれ  
野よりあしゆて鬼と鬼ゆ合ひて人鬼と  
なづくはとせよ前より  
ぬよかの河あら水とくの器よ簞と似たり等  
得ゆゆかほあひみるの差乃ゆうじゆくゆ  
水のみに一水ちよと差乃ゆきゆうじゆくゆ

亦本乃河海の水とある乎と云ひて又一云ち  
云の水は海乃水也而水と奉するかと云ひてカの祖考比  
鬼神あり格もとく陽極と云ひてたゞより陰鑑と以て  
水神と云ふ事と云ふ事の精神主れ祖考の精神と  
彼此りと一氣をもつて一氣の相應もる事もろむれ應  
ゆきかれと一氣をもつて天地の間へ生れいつ  
者なりにまのうち化の氣の生れ出すと氣をもつて  
る人をもる人をもる一輩れ生せし處をりやと謂ふ  
る人をもる人をもる陽をもる物の人をもる者をもる一氣  
乃生せし處をもる氣をもるおきする事と謂ふ事と

いほきの人物と感へつゝもとらざれども其體  
考め、あはれの事無乃聲りとうきもとち波は  
難をなする所とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと  
薬の性のとよはあはきを寒うり或へ冷あがひを人  
温あり或も熱をあはぐ補ふへく或も涼をあく蟲等  
あり有るうらまくみすくに等一かに君とあ  
はせか 佐使とあはて 医方まと金すまは  
一かにあはてあはてに唯一筋の湯とめあはく何きふ  
言ひひづれは熱をとどと辨ちへうほくもんを  
彼すふかといふ心ふゆへきふゆゆき肝ふ行へよも

行ふゆく脣もやへまん脣よゆき脾肺よ行へまん脾肺  
うおよてだせくろの頬ほゆく相感すれどとらやまと  
まゆらこくまゆらこくは又人死くまゆの鬼魄れどには  
帝く天せの間みそくしてモ氣と共に運行し止くと  
あくはゆく盡るまとならむあや天地ざまうのみす  
乃如キミ清長あり人すてにまゆらく死テ歸  
まゆらく死マラヌリでるほくおとちまゆべよ彼女席  
うちつと寝てまゆらくまて尊きりやーふと  
汝の先にまゆふ世數れまゆひし降ふとゆくへ聖  
人まちかた君臣乃今代ゆくとて上下の禮をばよ

まゆ一れまよハあくめにかがくをぬき御るまくわ  
らをくまくハ子きのりひまんおの精と用くはとた  
まくはくまくハ鬼鬼ほくまとまくはく精爽あるく  
神明くいづくうはかれ理りかくやかくつゑ  
おこうう魂をまく所く氣をく形くはく取消され  
て是はくく取弱クハ事とく又よく人貴る  
まほよくくはく魄を形とくつて強りゆくへ人貴る  
まの勢大くくまくはく富めくハまの養厚  
くそ鬼鬼子産のゆくゆく衣食が如也おまえ泰春れあはうたり魄魄すく  
つづくハたのづく精爽ありて桂とく秋がいまだうれしき夷とく限つてあるれど其

卷之三

三

兔卦而之川河也ナウルモト天子ノミ富  
四海内とたゞせ治ム内事ハのみわれ社と司ム  
ミセムト充ナシトといつ角ノ聖子神孫也セ  
ウシヌツセジクンハカム天子ナム神上帝  
乃御傍よた右ナムアマシイガト  
ト季乃神靈天子トナラビヨヘト  
ナリ諸侯トアサトトム人トミム下トムシテ  
ミム全トカレヒヤの精を用トト打トム  
ミムミ審トガラシトミの龜兔トミムモタタタ  
ナリナルト神れ在トタル亦遠トモ近トム雲ト  
半トアツメト一トミタウサム先トキムの禮セ

席より下つて乃至まの數里カヘタリと云  
ゆきまへまと家席の禮アハシマ大祝の席ハラセをも  
うそばに其館を親丁アヒタでにはまよめモヤメをさしきよ  
うほアヒタて祝アハシマ  
歌つゝあづかせの祝主アハシマシテ  
を享賓アヒタ乃アヒタふりとアミアミ人ヒトの氣ヒトツを  
ま停アハシマ大祝アハシマのアハシマ石せシタセササギ  
もアヒタ人ヒト又アヒタの遠アハシマ世アハシマ近アハシマには二世  
もアヒタ其アヒタと云アヒタふうはアヒタ後アヒタよあこアヒタれ  
春秋アヒタ乃アヒタふとあり往アヒタるも幸アヒタしいアヒタと云アヒタれ  
我アヒタう人ヒト乃アヒタ稀アヒタ九アヒタと夫アヒタと云アヒタれ

精より下王者の大聲も王者すてに太祖の廟とたゞく又始祖の下りて生  
まひてとさうか帝と太祖の廟おまつぶ太祖を祀りすととしあえま  
民ふむくい遠きと遙せまゆ是遠くとてうしはを役とまつらし  
あくまうまきをまつてはくとてはくとてはくとてはくとてはくとてはく  
れれ天下ておほるよろしくとてはくとてはくとてはくとてはくとてはく  
其寧汝指すまひと徳徳く作るしうのちとまうりせん  
尤うりうき放くとてはくとてはくとてはくとてはくとてはくとてはく  
せんよあが太祖乃廟百世とひそむ移すへくとまうんと  
とハ凡天下國家乃君となうて百世の太祖とて業を  
創め統を無くまよ御事ハなじくと彼の事とまうナ得  
けよと天とまよ高大厚地よとくと名山大川の宇  
を聚めまひゆくとては天地山川百神のまことまうま

鳴りては上帝にたれまゆひて其木たまく日星  
と其みゆくのむかへておれへる一天の下一國のうち  
うとくきの徳をわくひや威子懼ひつよ  
あらゑんみ徳すと祀そろみ神祭まん車推てそ  
測るへいふひんやサアヨ祭乃御事たまく百  
せとくくうはまくまくまくまくまくまくまく  
いおれ祀考乃精神ハおれ行く度から法精  
神すワ謝上蔡神すあるとれまくおあらんすれ  
うち是神考乃本源あり朱子すとばくはとけ經

タヤカツツヘキ又言チミの事ハシキあれども大き反  
理とはすすんでよ物語力候るあり人かくこれ  
シテ鳥骨鶏とつづれとかひし者の中セリはば  
鶏の毛うろきありうろふうるをあざらちう有モ申  
肉と首うろの鳥毛をすすむよりうろみをもと  
クアカルハシルに肉と骨をうそそらほとと  
仕合ひるをアカルハシルをアカルハシルをア  
リハ雌雄をそそり浮く餌ヲ千程あくま多産  
シテ雛モヒ形ヒシナ其父ヒヌシヒヌシハ  
ナスラム雛乃大ニアリアリてアリヌヒヌヒヌモト

形ヒ似テ毛色の主ハ黒アリカバノロドアヤヒ  
アリ内臓の主アリルヒ更一アリルヒタリムモハ  
主毛ハ似アレヒロメ取ヒ帝乃鶏也アリナム子  
ヒナスラムヒナスラムヒナスラムヒナスラム  
鶏子アリテノリ江南乃鶏毛ヒシヨウナホウカバ  
ナム地言葉アリテノリヒナスラムヒナスラム  
ヒナスラムヒナスラムヒナスラムヒナスラム  
ヒナスラムヒナスラムヒナスラムヒナスラム  
ヒナスラムヒナスラムヒナスラムヒナスラム  
ヒナスラムヒナスラムヒナスラムヒナスラム

まことに神あらうとおもひんすに立派でよふ  
うへは大きあらうと立派でよの後はのこ試もる尔  
大さうは定うそをかうりうすとヤキ魏方未漢れ  
長は王の吳荀<sup>スミ</sup>墓と云う<sup>ス</sup>監力王の六世の孫吳綱<sup>スミ</sup>  
容の玉<sup>タマ</sup>は仰てはゆる河を渡る<sup>漢より魏方未まで皆然</sup>  
唐力附學の鄱陽王力<sup>武帝第十九子</sup>荀恢<sup>カイ</sup>の子<sup>年少ヤたまふ風也</sup>墓と云ふ<sup>次回</sup>  
比荀頫<sup>カイ</sup>と云々王の形容<sup>タマ</sup>仰てはと語る<sup>玉の財と</sup>  
石室の<sup>トトロ</sup>人乃多殊<sup>ミテ</sup>五世の後からす人<sup>の主</sup>祖先<sup>アシ</sup>  
仰てはあらうとすみはせきへかの鶴の事<sup>トトロ</sup>  
くよ風うるを芸鳥骨をくる子とうてとすまく

すむも辛ニラ傳め後<sup>アフタ</sup>され鳥骨<sup>カニ</sup>と相せす事  
うふ遠く<sup>アラカミ</sup>まく<sup>アラカミ</sup>まく<sup>アラカミ</sup>はゆの窮<sup>カツ</sup>ながて  
鳥骨<sup>カニ</sup>はすくに尼め<sup>アラカミ</sup>アラカミハ人の祖考<sup>カニ</sup>精神  
既<sup>アラカミ</sup>はくやふ仰てはゆるゆく<sup>アラカミ</sup>鳥骨<sup>カニ</sup>をみた  
左流鶴<sup>アラカミ</sup>生<sup>アラカミ</sup>はゆく<sup>アラカミ</sup>よ孫<sup>アラカミ</sup>の精神<sup>カニ</sup>おけ  
から祖考<sup>カニ</sup>精神<sup>カニ</sup>あらはゆ孫<sup>アラカミ</sup>の誠故<sup>カニ</sup>おけ<sup>アラカミ</sup>  
すううううの精神<sup>カニ</sup>ある<sup>アラカミ</sup>祖考<sup>カニ</sup>の精神<sup>カニ</sup>事<sup>アラカミ</sup>格<sup>アラカミ</sup>  
理<sup>アラカミ</sup>は<sup>アラカミ</sup>似<sup>アラカミ</sup>つむ<sup>アラカミ</sup>漢<sup>アラカミ</sup>の武帝<sup>アラカミ</sup>の時<sup>アラカミ</sup>未<sup>アラカミ</sup>央<sup>アラカミ</sup>敵<sup>アラカミ</sup>の鐘  
り<sup>アラカミ</sup>を<sup>アラカミ</sup>して<sup>アラカミ</sup>は<sup>アラカミ</sup>鳴<sup>アラカミ</sup>こと<sup>アラカミ</sup>未<sup>アラカミ</sup>未<sup>アラカミ</sup>て<sup>アラカミ</sup>そ<sup>アラカミ</sup>ても<sup>アラカミ</sup>  
すみか<sup>アラカミ</sup>此<sup>アラカミ</sup>事<sup>アラカミ</sup>を<sup>アラカミ</sup>向<sup>アラカミ</sup>せ<sup>アラカミ</sup>まく<sup>アラカミ</sup>東方朔奏<sup>アラカミ</sup>呈<sup>アラカミ</sup>

へくま山金刀山乃山ハ銅のみとうケ行  
陰陽乃寺類をかくていよま子とねまはお其  
す山山やそらくハ前所あめちん易ふる行  
陰よぢやてよちに和まといよも精みせり  
五男うちかわにアメ遊行がぬへとゆ  
あらうるみ内々南朝みしら川事三十里と  
奏すまくらめちゆくほ銅みせけとテ度有りうれし銅の銅山  
くがまくせと今人多々令ゆと車をハヒトヨカキモヒム  
こうきく力理とよく通じてかくせ一章乃感すと不も  
百せ經すとまくら車はラカムキタハレ子  
神を非禮とす民を怨族と祀らすとよもと

我族類アリありはるか今より神事ミツルを徳タクといと  
す。サハ食と享る事シテあたまに陰鑑カムイミツルと以  
てとらんと陽燧カムイミツルとんてみ神ミツルとす。不  
水火ミツルにゆくにゆくにゆくにゆくにゆくに  
うめ氣別カムイミツルおきすへき乃理ミツルのつゝく備タケル  
されし又後アフタるを考ミツルす。大カムイとす  
事ミツルし此經カムイミツルやふ行スル夫子カムイ乃春秋ミツル哉カムイあ  
言人カムイ滅スル鄭カムイトヨタニシキトヨ吉人カムイ歎ミツルみ因ミツルとうち  
亡カムイにハナメカムイ汝言カムイ公子カムイハカムイモトカムイ鄭カムイ乃君カムイの外孫カムイ  
ちカムイと養カムイひ候カムイ。

卷之二

卷之三

久之公年少の昔の女郎の夫人と稱す鄭乃夫夫人の甥とをもとすと傳ひて實り後  
子ト號め居外甥と名づけられ候事と云ふ。書にアミスコウは後  
妻として黒姓と云ふ。先儒の事と論じて。此漢陳氏安姓と養ひて  
後へ陽と號し事多く如くありと陰多くてふ  
徳とえいひりと接するのみ鄭と姓の因み  
夏乃禹王の御後を封す御子と號す。丁寧  
かやかなひぬも圓小なりと云ふ子を原め後  
君のほど承へきりては無くらまんうちまよ  
多す所ふれ。家業の統をうつらせら  
心車不孝めはくからず。つはいり財物ハ夫子のそ  
き跡よとくわせたるを古人の如く考へ

多の事やむと仰るをうそとす。是れ鬼神乃情事也。  
かく教わると先傳へあらへ奉じて今ま凡人のうち長  
く天年八十餘年又年八十からあると考へて  
病は多くあれども死後は心地よくあります  
まことにハ勇壯乃人戦陣より多く戰  
ひ或ひ久暴血乃人刑戮より多く得殺され或ひ  
自ら刎ひ行ひ、或ひ自ら縊生或と冤恨を持まく枉りて  
殺され元氣にて殺死するハ暴虐の如く多々ござり或ひ  
婦女乃痴く愚く如きとてやうふひは僧道乃務  
き精神をもつてゐれ信否あるまいと云ふが如く精神とす

かの富士人權勢力人のみ降伏せざるを伯有と云ふ  
と云ふ 箱根とくみゑとくはるの氣散するを云ふ  
はすには免降魄あると天地の間へあつてたゞひ  
妖をたゞ 怪体あつてあつての厚を外へ 疲をも度  
かずあらゆ先王乃體み天子ハ那妙の身より泰屬と  
祀アキヒルセナ 諸侯と公屬五祀乃  
大丈夫族屬三祀乃  
支庶人を亨親の後をもれとすれまれ事これを乃  
鬼め歸す。一處にすすむかきの爲  
音本のいひが御靈  
ニ下御灵をたゞをせ  
尊氏の軍の後、徳宗に於てさうきあつて  
徳宗乃亡きのそとや。事のふるのふる

神玉の如きかと形ともいふべからずす水  
觴人情よやくマ取散ハ明よかれ云々後氏  
有賣人灵あひて夢ハ靈ケ生れん云々トニ  
シテアサム人灵たゞ人死ニシテナリ事人モ  
行ひるもつまう人をあひ人妖と名モトス人  
乃厚体もす如キハツヌギヤシルヨリイキ  
ミエヌアシタニセシムが灵ありきに形ハ奇あ  
シキ神人靈ちゆる爲ナリ一チはウの生原  
妖とちゆる形五セシム厚とみナリシテ  
之厚体ちゆる神也

奴をもすゝまくかまきとほきともさへ死せば  
もの神永く形とてゐる。たゞ神の形まゝの  
形とあ入する。とある。ちよかまくまく形、ハ云々、  
かく神とこそま人ちよかふげくかまくとまくも  
かくじい家はさりて万里の外行。前まく御門  
が入する。まの朝よ都とまく又家よゆ。ありあと  
きる。まの遠きをとよへ異あらへて。そ家とあ  
りてあて業。わくかわくとくに仰。ありあと  
やねます。奴をもすゝも痛み。まく厚それもろ  
とく。まく今しやく五夫。孟子。方

此執のうちも姫姫乃姫うたひもひ人を慕ひ人を惜て  
御仕へいのめりのろひとすなれより人からむる人  
に夢とうはくとのアラスノアシトヒテヒテ  
如くたゞるみれ是れわらうす本物のやあらんかくひきえ  
レレウタマサはうちニ帝の御外よ弛するこゑ  
多めすとほく巫毒のとくにけり巫毒の事とくに巫  
のた遁とくノ人御まくせざる原巫も女席子の腰原巫も女席子の腰た石を  
男女もれ入を  
坐すとふとも一様の武毒益つねをせ近い一席着子  
來きてはくる人比キナ枝とてあらまくひすあら  
玉穂をおふやませアラセラセるとアヌシひすあら

少子と女めどに立とつて巫臺乃  
事はあまをまひてはる太子とあま行かずあれ余偶  
人と太子の宮中より車を引きよと停り奏たりこれ  
太子も車を廻らる車にりかく失禮し一ト司馬遷  
史記よスヌムアヌムル呪呼敵リムシの奇鬼ちふる孫良  
ト又アラ男女よとほくムシのハ怪鬼ちむく捕まつとモ  
りナリ冥界<sub>冥界</sub>乃設  
トヒミも男女成らんとすし或入神伊ヘイカモ  
めらす方頬ハ天地み向アリテハ対鬼神歸也  
キ類不感トシテ人よかまらく妖を取ヘ怪死  
ありて人死暮もハアシニキハアシニキ辛體子

是をとどめ  
敵よんか  
妖ハ人ようりや  
あらるこ人まじ  
をうへ妖だづくまは  
はとアラタマタマ  
た傳シテ  
我んにむ  
所あわく或人をひ死モ怖  
アラヤシムの妖と  
招きゆきあらん  
事まえくハあくまく自身痛  
辛考シカウキを嘗  
萬マツモト無ムツキアリ  
隙セキヨキニモ  
もれすり唐カタマリの貞觀ジンカン  
乃オノ西城シキ婆羅ボロ門モンの信アガシ  
人ヒトを呪クルシテキキムム化ハシムシテ  
忽ハシムシテ幸ラッキあま  
いに太史令タシヨウイ傳タヌキ大タケルを呪クルシテ  
忽ハシムシテ彼カミ傳タヌキ大タケルを竟タナメ  
邪ヤハラか否カと汝得タマシモキ一ヒカノノカの邪

卷之三

彭生も永とすれ類へんをすりづかぬいきる人よま  
幸せらひよ人乃想ふすうて感へ得すがうすま  
遊鬼行うてかひ人今すからひふあうむう人を  
くにとわくふよろの妻あやうちて舟をねらふく  
木へはしお夫あくく金山寺よりて僧と請へて  
ちつき跡あくくかの女をもうちよ下部女  
ふともまく自らねらむの處よだるもとくひぐれ  
かみれぢけのじまくようそくめ鬼をかくろのせ  
みゆく迷つせんすれ行くたとくせん人ふ袖とお  
けゆきよかで三月乃後鈎す。翁の妻と異へて來

もとまことにねりておもひふあはるをうめく  
ほれゆよてうづくふくまよとあむれゆふく  
よせくぬきまくほくらの下部女乃まのまく  
ちまくわ乃ゆるへようやくわく遙りふ相應  
りゆるあらうとう宋のときのまこと  
程朱類傳うたう人乃遠ま回  
わくわくわくわく妻のまほんうそ人妻乃  
簪とうりて壁乃やよめせ一耳のあらうとう  
あまかわくわくうそあらう他のままで寝まく  
せわくわくすくよはく伝う風うる男う妻事  
告げ故里よしわく妻夫れゆくまどうはまく

口獨りまくふきまく比うおもひゆゆくへ人乃  
すすとだやへと聞くふきまくきめう夫乃すこ  
ぬすてに死しげりぬりじくまくわく簪まく  
我わくざくまく死せ一耳はくうういはくまく  
くわく乃壁の中と思まくへとれとすへとたわく  
まく耳はくうういはくはくうた耳と思まくへ  
乃くくみくわく壁みすとアラヌ釦ハ有リ妻は  
天ふ作くはくシテシテあくの辛夷へあると  
けりくわくうて夫ハ病金くからりまくわくれく  
妻もだくう人の鬼のほりあくまくと大きよ

身不自知ひふりと是を多うのうとせんと幽鬼法  
人をうそもよてかくらふるまひうふたうとまつて  
はくへば相子并赤城るまくとも宋の時のみ  
をわく起鬼はうかれり鬼とまくハまうかの人に  
て或は人相子并赤城るまくとも宋の時のみ  
人をうそも物より事を得てんみ人をまう  
わく生れをまうとつて疑べうにや相子并赤城るまくとも宋の時のみ  
あさば人として自身又人をまう黒形くろがたひきゆゑひきゆゑそくへあくく人を天地の胸  
だくだくは魚力水おとこいの水おとこいの水おとこいの股おとこいのえおとこいのへ  
身みと浮うき水みず如ごとちの身みに因いん外ほかとれを  
天あめ也氣おありて化かの塵ほと氣お能のうもの理りを付  
ふ孟子  
乃後我父お母め乃お母めハもとから天地の靈れいとて

ウク氣おもと天あめ地ぢ父お母めおおけし慶うきななうほとと人ひと  
アアハ鬼おとと鬼おハハ人ひとななうあんあんみみががまま記き  
一一きき事こと人ひとののびびららめめまますすみみ  
天あめ地ぢ父お母めおおままととケケまますすみみとと得とくく自じらら鬼おととああ  
おおとと人ひとととむむ人ひとととくく皆みな盤ばん古こ氏しのの代だい  
人ひとは死死ととせせのの人ひとととくく今いまのの代だいおおううるるやや  
天あめ地ぢ生うれれ理りいいててううい有あくくまま人ひと物ものななくく  
つつそそせせ理りううらら車くるまははかかれれととももハハ羊よう祜ご

筆のことを人の事かなふと考へつゝも  
仕へ立てる仕へ立めり周の守侯へ獄井乃はり生  
きり 殿の傳説、無尾ふ孫アリ早とちる力ある  
足と足のえと傳説アリ傳へたぐひしまりやうめひと  
うめひうかとひまわりひ傳へたぐひしまりやうめひと  
はくよくまんあくあくやく鬼の人牛よしれぬけり  
宗ゆゑを都下乃一ゆ覧アリヨウキよそをゆ招清  
節アリあらんあま清ふねすのとく利き  
徳華アリけありアリトモモらく幕縫と涌もんれ類あり  
萬能ムニ西城乃はり  
みまこと思ふ風シナリヒ人アリルヘ西蕃  
力修のみセアリがもの兔兔いぢど散ざりてうの兜

の身に附託せりあとうひ候はるを物の性  
盡たるやうとくゆく氣す修々よくあるふ蠶へ性の是す  
よりく是と細かくあらてはるの物形となす物  
あり漢のうよやんやんの女の口承うで枕よどて  
聖乃づきうわ清の家れ福を細よと仰くあく豚ぬ  
みくみすあく乃日子の蟬せん蘭らんをあけらかの女乃  
形すく仰うかほく圓く肩のかくもとてばくみふア  
ヒリ詠うかほく金もふすくとふ物およく女乃形ふ  
すく汗あせ中郎ちゆうろうあれをくく左の巻き右の冬を  
浮す冬卷うきふねうり價あらて買  
得くそくとねりて琴乃絃ことのげとあらて得く

そめくみぐふありふたりと孝子巣くわいじり女くわいじ名な參さんりしと  
アシヒキ巣くわいじの巣くわいじとまくとあら巣女くわいじの巣くわいじあらと  
えらひーとく賈氏說林くわいじとくらゐ女くわいじ  
この蚕くわいじとあらすうがくすうく蚕くわいじの性せいの灵れいある  
あくをよめの女くわいじの塵くわいじとあらすうや人ひとハ万物  
の塵くわいじあるものをあらすうへ方ほう室人しつじんみがへ  
女子くわいじはあらすうはく、同ひと邪色じやしきをくは耳みみに承うけますす  
だらう飲食くわいじう起居くわいじの事ことをもむきておうけ慎つつうり  
うれ船ふね乃の子この事ことをうくふくおもむけたる一いつよろ乃  
西にし夷いの威いがりん爲ためうそをせうりする夫めは

ノム乃中ニ鬼乃肉ト食シ生薑トテ奴事ハル  
イシキアカサエ薑トテヘウタマニ子指アリ子モア  
モシムトテ鬼乃肉トテラヘタマシム唐りケンキ  
ミ宿子カタヒテシ  
トイシ伊クシヤモチルトスは或ヘ唐缺ケアリヒ  
指多キハラメテマケテクシの後身ヲハシニテ  
サニ氣ハキテマテモテモアリ猶モサヒリビキニカ枝子  
キシテモキシテ人ノハシテモテモアリキモリシテモキシテモアリ  
アソトシテ氣アルトモテモトケ取次アラムトモア  
時ハ共ナリ乃氣トハシナムノヒシテモトケ散  
アソトシテ氣アルトモテモトケ取次アラムトモア  
モモトシテ潮乃モナシニ滿キアリモ海子流キシム

河水乃セキニシテわくまノ一はくに瀧キノ内モ如  
一人の死ノトコロ附モテモニ女乃傍ら立スル而  
キテラサムニ戸セラバよけニシテモキセキシル  
其あキシラキキニテナリヌトヨリトモアキシ時  
敏アキシタカシキミテ年たけて後半ノアガキシ  
テナリシテタカシキ人乃立得タカシキ音トヨリシテ長タカシキヒモニ  
感アキシテタカシキ氣ハリシニ散タカシキ音トヨリ念キニテ足  
行のう不オ乃卒性アリハラムモヤ行年紅了蓮  
乃實成也了記凝寢乃中ニテ之れをばん花城

りくはもろめを育て一年後藍乃子をめぐらして  
おちたま本に如く紅葉の下物として人とせん人等  
で物と生じる人物の氣味がひみ相應しめども  
この小川の理をやうにはちく女子乃丈夫  
化へ丈夫乃女子に化へ男子ちく子とうめの類  
よみ史傳によくアラマツ又人生ある虎と虎か  
牛狼虎と狼とあく 太原の王  
李勢 あくらへ死へきるる多々くわねすまたいふ  
夫人 合ハ 又龜とあり は夏力黄地と取て  
あら化へるふねたるやーされ各自アラマツ  
陰陽乖亂の事乃りとす不多くも國家滅亡の兆の

おもやからぬ風にゆき候へく夫子の語を  
経てかへて處るべくちが男は女となざる女の男  
となむる事ハ漢の京房は易傳の女子化へく文丈と  
あらえを後昌へく賤人王である丈文化へく女子と  
あらえ陰乃陽ふ徳をより厥咎を元ふまと男化  
姉政乃行了をりとアヘナウス春秋潛潭巴ナム男の女  
と化すも賢人位となる女の男と化すは紳人王となる  
あらえれハいきへくをうの事あわへとがアヘナウス紳玉の  
ほとき周の文王乃四二年を武王位を即せきよひへ

へれまちのまき今乃人男女もやつれと女色うちまき  
基勢ひかく有く物ことくいはる  
らん皆衰世のれとそ國め北なれハ京處りトヨムと或ハ  
あやまの處くす天人の神遠くはなゆめ変  
ほくとくもあくわくはまむはよめ變  
婦人と成至暴のみ者へ化  
猛虎となふんひをます  
とくはよせぢとくすと得すもといへ譚氏  
みえ  
暴惡乃んあるトス人トストイはく化せの席  
食欲みくらきのも人みくらき化セキの席  
す化でまし處みしれハ縁て形のくんでいはくあん氣

変すと生まざと死まざとある形とて變すと彼大に能く  
時人たらずして熱一怖ふとて水なまびて寒ふとて  
ハ物の一あくと生まざと死まざと大暑もあくとて寒  
く大寒もあくとても熱大ふ風一病を患つて人を  
虫脛に中は生ふものあり彼の形とあるとて病  
よりかく寺一ゆきはれいわり血肉の毒を害す化一す  
蛇丸もく鼈の毛の席狼と化一鼈蛇也と化す人  
と相手す事とあらざり其靈たるよりへ體とが  
すく皆化せしむるかの雀蛤とあり田角鶯スカトリとす  
こうかね化乃変ほひふりくめどもん人いまとさうす

物の変化乃理かあらばりかとて之に限はず是  
は物の理よりはるゝ物れ変化と云ハ事とふありて  
てはすとて物の変すハ云ふのはの乃ちと云ふと  
いふんとあらかじめに雀蛤とあり田角鶯や  
あらん類も禮經乃載す所といへり礼記人あらひも疑  
ひらきもハ信を蟬の幌帳とあり子子の坂とやまみ  
てはまへ人ほりふるうとてかんちんとて終は一人玄  
う事あらかじめ人を信す。慶へ同ひと同れたま  
うはうせとひとすみく終を傳へてや彼人化ケツ  
あとなじみ類も本うとさみの理にたゞかぐ人の短よ

うるはもくあくはやうのえ子乃怪とかうりをすく  
まくわくやあく

鬼神論上終

立松氏

